秘本三国志（一）

陳舜臣

秘本三国志（一）

陳舜臣

秘本 三国志 (一)

昭和四十九年十二月十五日 第一刷
昭和五十二年 十 月十五日 第二刷

定価 九八〇円

著者 陳 舜 臣
発行者 樫 原 雅 春
発行所 株式会社 文藝春秋
〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三

印刷 凸版印刷
製本 和田製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Shunshin Chin 1974

Printed in Japan

目次

黄天立つべし　五
月氏の美女　五四
曹操、東へ帰る　一〇二
洛陽、わが手にあり　一四四
鉄騎、白波へ去る　一九二
白馬寺だけが残った　二四〇

裝幀　御正　伸

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

秘本三国志

（一）

黄天立つべし

1

蒼天はすでに死せり
黄天まさに立つべし

そんな呪文のような言葉が、東のほうで流行っているという噂があった。

「それは、みんながおおっぴらで唱えているのですか？」

張魯の母の少容は、東から帰って来た陳潜にそう訊ねた。

「ええ、そりゃもう、おおっぴらもいいところです。青州、幽州、冀州といったあたりが、とくにひどうございました」

と、陳潜は答えた。
現在の地名でいえば、青州は山東省、幽州は河北省北部、北京近辺、冀州は河北省南部である。
「漢の天下も、もう終わりですね」
少容はため息をついて言った。
五行説によれば、漢は木徳によって天下を得ている。それにとって代わる者は土徳によらねばならない。木の色は青、土の色は黄と、これまた五行説できまっている。
蒼天——青い天子、すなわち漢の王室はもうおしまいだ。黄天——土の徳による新しい王朝が、まもなく興るであろう。……
わけのわからない呪文のようだが、その裏にかくされた意味に気づくのは、それほど難しいことではない。ふつうの常識のもち主であれば、すぐにそれを悟るだろう。
深い謎ではない。むしろ浅すぎる。
すぐにそれとわかる不敬の呪文が、おおっぴらに流布されているのだ。
漢の天子がみくびられ、その権威は地に墜ちたというべきであろう。
王朝の興亡に、流血が伴わないことはない。天下は大いに乱れるであろう。——少容はその予感に、ため息をもらしたのである。
その場には、少容とその息子の張魯しかいない。だが、陳潜はあたりを見まわしてから、声をひそめて、

「恐れ多いことながら、私もそのように感じないではおれませんでした」

「やれやれ、大へんなご時勢に生まれ合わせました。でも、幸いここは中原から遠く離れた巴の国です。うまく手綱をさばきさえすれば、戦乱を避けることもできましょう。潜さん、魯をよろしく頼みますよ」

と、少容は言った。

現在の四川省の成都地方を蜀、重慶地方を巴といった。

長安や洛陽など当時の政治の中心とは『蜀道の険』によって、へだてられている。

——蜀道の難きは青天に上るよりも難し。

と、李白のうたった険路である。

また華中や江南とは、三峡の険によってへだてられている。長江（揚子江）はそのあたりでは急流激湍のあつまること二百キロに及び、おなじく李白が、

——覚えず、鬢の糸を成すを。

と歎いたほどの難路だった。

天然の要害といってよい。だから、日中戦争においても、重慶が抗戦基地になったのである。

少容はこの天然の要害に、戦火が及ぶのをおしとどめる防壁の役を期待した。だが、難路とはいえ、越えられないルートではない。蜀道や三峡の険以外にも、手綱さばき、すなわち政治的な手腕が必要だと考えたのだ。

「またそのようなことを……」
と、陳潛は苦笑した。
彼女から、息子の魯をよろしく頼む、と言われるのは、いつものことだった。それが彼女の口癖である。だが、陳潛はやっと二十(はたち)になったばかりの弱輩であるし、張魯はたった二つだけの年下にすぎない。
「いえ、潛さんだけが頼りですからねぇ」
少容はそう言って、ゆっくりと肩を揺すった。その肩から、なにやら匂うものが、こぼれおちたように潛はかんじた。
十七で魯を生んだ少容は、いま三十代の半ばのはずだが、どうみても二十代にしかみえないのである。
(きれいだなぁ。……)
毎日顔をあわせているのに、潛は彼女を見て、まぢまぶしくかんじることがあった。
陳潛は赤ん坊のとき、張家の門前に棄てられていたという。それを張魯の祖父にあたる張陵(ちょうりょう)が、引き取って育てることにした。その直後に、少容が張家に嫁入りしたので、彼女はよく陳潛に、
——この家では、潛さんはあたしより古いんですからねぇ。
と言ったものだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

張陵は息子の嫁の少容に、

——我が子を育てる前に、他人の子を育てると、包容力のある大きな人物になる。我が家にはそんな女性が必要なのだ。

と、棄子を育てることを命じた。

そんなわけで、潛にとっては少容は母親そのものといってよい。それなのに、彼は少容に女をかんじた。いけないと思うのだが、人間の性はどうすることもできない。

「私にできることなら……」

頼りにされて、潛はからだを縮めた。

「張家五斗米道の運命は、すべてあなたの肩にかかっております」

少容はすずしげな声で言ったが、それは潛の胸を焦がすほどの熱力をもっていた。

2

張家五斗米道とはなにか？

道教の一派である。

始祖は張魯の祖父張陵であった。

張陵はもと沛（江蘇省北部）国の豊の出身である。現在も徐州市の西北に、豊県という同じ地名が残っている。漢の高祖の故郷に近く、そのあたりの人民は、漢代では夫役を免除される特典を与えられていた。

後漢順帝（一二六―一四四）の時代に、張陵は蜀に遊び、鶴鳴山中で道術を学んだ。

彼はそれによって、よく病気を治すことができた。

病気治療の謝礼が、米五斗ときめられていたので、人びとは彼の道教を『五斗米道』と呼んだ。もっとも漢代の斗は、現代の升にほぼひとしい。斗酒なお辞せずといっても、それは一升酒のこととおもえばよい。

病人は自分のおかした過を告白し、自分の姓名を三枚の紙に書く。一枚は天帝に報告するために山上にかかげ、一枚は地祇にしらせるために地中に埋め、一枚は水神に告げるため水中に沈めた。これを『三官手書』という。

つぎに祭酒と呼ばれる、この教団のリーダーが、病名を宣告して、『符水』を飲ませる。符水とは、呪文を書いた紙をうかべた水のことである。

病人が自分の病状を説明しないのに、祭酒はそれをすらすらと述べる。だから、病人はかなりのショックを受け、五斗米道の力を信じ切ってしまう。暗示にかけられた病人が、そのためにじっさいに治癒するケースが多かった。そんなわけで、五斗米道は繁栄したのである。

病人が教団を訪れたとき、受付の信者が、

——お気の毒に。どんなふうに工合がわるいのですか？

と、くわしく症状をきき込んでおく。ただし、この受付の信者は、ずっと病人につきっきりで、そのまま祭酒のところへ一しょに行く。聞いたことを、誰かに伝えるような機会は絶無のようにみえる。祭酒の前に出るまで、誰とも接触しないのだから。

病人が告白したり、三官手書に姓名を書いたりしているあいだ、受付の信者は病人のすぐうしろにいて、声を出さずに病人の症状を口にする。祭酒はその口のうごきで、病人のことを知り、

——おまえさんの病気は。……

と、ずばり言い当てる。

読唇術にほかならない。

張陵はこの道術を息子の衡に伝え、衡はさらに自分の息子の魯に伝えたのである。ただし、陵の死につづいて、衡も若くして死んだので、魯が二十になるまでは、一番弟子の張脩が教団を主宰することになった。

五斗米道は巴蜀（四川省）に盛んであったが、おなじ道教の別派『太平道』は、河北、山東および中原におおぜいの信徒を獲得した。

教祖は張角という者で、鉅鹿（河北省）出身、自ら大賢良師と称していた。

この太平道は五斗米道と、双生児のようによく似ていた。病人が頭を地につけて自分の罪を懺悔し、符水を飲むというところはそっくりである。違っていたのは、受付の信者が唇をうごか

さずに、信号によって病人の症状を施術者にしらせていたことであろう。彼らは、九つの節のある竹の杖を用いた。たとえば上から三節めの左がわに手をふれると、それは患部が心蔵であることを意味し、その症状は額に手をふれると、キリキリ痛むこと、顎に手をやると、鈍痛のことであるなど、二十世紀の野球のバッテリーのサインのように、こまかい取りきめがあった。

唇のうごきを読むのと、サインを読むのと、違いはあったが、まず同工異曲といってよかった。

病気が治ると、大賢良師さまのおかげで、ますます信仰を深める。病人が死ねば、それは本人の信仰が足りなかったので、遺族はまた、ますます太平道を信じなければならないことになる。

太平道はみるみるうちに、華北から中原にひろがったが、これについて漢の地方官は、中央にたいして、

——張角たちは、人民たちを善導し、教化している。まことによろこばしいことである。

と報告する始末であった。

人間の精神は、同じ条件におけば、同じ方向に傾くものであるらしい。あのひろい中国の東部と西部で、ほとんど時を同じくして、太平道と五斗米道が、隆盛をきわめた。

教祖は太平道の張角、五斗米道の張陵と、どちらも張姓であるが、両者に血のつながりはない。地理的に遠かったせいもあるが、両者に同業者としての連絡もなかった。どちらも、相手のことを、風の便りにきくだけであった。

「潜さん、鉅鹿へ行ってくださらない？」
東へ旅行した翌年、陳潜は少容からそう言われた。
鉅鹿とは太平道の本拠のあるところだ。
「はい。どこへなりと、よろこんで参ります」
と、陳潜は答えた。
（あなたさまのご命令とあれば）
と言いたかったが、それは抑えた。
「訪ねる先は大賢良師」
と、少容は言った。
「わかりましてございます」
「去年のあの呪文……蒼天はすでに死せり、黄天まさに立つべし。それに続きの文句ができたそうです」
「どのような？」
「歳は甲子、天下は大吉」
「歳は甲子……天下大吉……」
陳潜は呟くようにくり返した。
ことしは後漢霊帝の光和六年（一八三）で、えとは癸亥である。

「わかりますか？」
少容はやさしい顔で訊いた。
「甲子とは、来年でございますな」
「そうです。……その文句がみやこのお役所の門に書かれているとききました。もっと略して、『甲子』の二字。……太平道の信者の家の門には、きまって書かれているということです」
「それでは……」
革命を予言する言葉は、去年あたりからひろまっている。ことしになると、革命の時期を予言する言葉が、それにつけ加えられたのだ。
甲子の年。――来年である。
しかも、『甲子』という字をかいた紙は、太平道の信者の家の門に貼られているという。とすれば、革命の主体が太平道であることは、もはや疑問の余地はない。
「行っておくれだね？」
と、少容は念を押した。
「否応はございません」
陳潜はさげた頭をおこした。少容と視線があった瞬間、すべてが伝達された。
「五斗米道のためだけではありませんよ。五斗米道にたましいを預ける幾十万の人間のためでもあります。……ひいては天下万民のためと申してもよろしゅうございます」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.